

朗読者の務めと悩み

——言語時評・十七——

工藤力男

『オペラの誕生』（東京書籍 1995）という本がある。第十一回京都音楽賞を受けたその名著の凡例が、固有名詞の訳出に関して特に詳細なことは言うまでもないが、ほかに日本語の表記に関する一項がある。その三分の二を引く。

一定の訓読みでは、できるだけ特定の漢字に同一の音が与えられるようにした。（落ちる、落とす、明る、明かるい、光る、光り）

ただし、連用形が二つ続いてはつきりと名詞になっている場合（召使い）や慣習が固定していると思われる場合（次々、場合）などはこの限りではない。

かくも正確な日本語の読みを求める著者は、本学名誉教授

の戸口幸策さん。ここに示された母語を愛する精神は、すべての日本人の見習うべきことではなからうか。

日本語学会、二千七年度春季大会の初日行事はシンポジウム「日本語の現状」。それに先だって、事務連絡、開催校の学長挨拶などがあり、続いて学界代表が挨拶した。ひとつことはなのに、野村雅昭代表の読みかただけが前の人たちと違うことが興味ぶかかった。パネリストの一人、東京辯研究の大家、秋永一枝さんは、先ほどの人たちの「二千七年」は、野村さんだけがニセンシチネンであった、という話から始めた。

日本放送協会で今ニュースを担当するアアナウンサーは「七」を必ずナナと読む。「七人」のばあい、シチニンでは「一人」と聞き誤られると思うのだからか。「一人」はヒトリと訓よみするのが一般で、イチニンは「一人称、一人前、第一人者」などに固定しているのも、もしそうなら、杞憂である。Iさんにとって、イチロー選手の二百本安打は「ナナネン連続」(94 正午)、南北朝鮮の首脳会談は「ナネンぶり」である。

一昨年長逝した、京都・大阪両大学の名誉教授・池上禎造さんの住まいは京都の一乗寺にあった。何の講義のおりであったか、京都では一条との聞き誤りを避けるために、一乗寺をイチチョウウジと呼ぶ習慣があった、と話してくれた。昔の京都人はしゃれた心遣いをしたのだ。いま京都のバスは録音テープで七条をナナジヨウと言っているはずである。日本人のシの字嫌いは年々深刻になるようだ。ラジオで浅草観音の縁日「ヨンマンロクセンニチ」のレポートに接し、駅の放送の「ナナジ」を聞き、テレビの報道で「ナナガツ」を耳にすると、いっそ「アカホヨンジュウナナシ討ち入りの日」を期待する気になる。

ラジオニュースの数字の読み方には、前々回も書いたよ

うに奇怪なことが多い。先日、ベルーのフジモリ元大統領の裁判で、「サンゼンナヒヤクマンエン」と報じた賠償請求金額を、翌朝(22日)のニュースで「サンオクナナセンマンエン」に訂正した。その二日後の朝、政府・与党の税制改革案に関する報道では、長く使用できる住宅の建設を促す減税について、使用期間を初め「ニセンネン」と読み、すぐに「ニヒャクネン」に訂正した(2007.12.13)。どんな放送原稿だったのだろう。

むかし「音楽の泉」を担当した堀内敬三の原稿には、「交響曲第五番」のように振仮名がしてあったという。今の担当者、皆川達夫さんも「シチジュウ奏・シブンノニ拍子」の厳格派だが、音楽番組の進行役には「ナナジュウ・ヨンブン」派もある。

テレビで小泉内閣総理大臣の所信表明演説を報じたとき、久米宏キャスターが、原稿を「なんとかのホカ」と読んでから、「小泉さんはこれをタと読むので困るんですが」という旨の言葉を挟んだ。久米さんらしいアドリブであるが、「他」に関わるその言葉だけがわたしの記憶に残った。その文脈では確かにホカのほうがよかったのだが、常用漢字

音訓表では、漢字「他」にあるのは音「た」だけで、訓「ほか」はないのである。久米さんはそのことを知らなかったのだろうか。

タでもホカでもないではないか、という人が多いではない。言語の感性が自分に近い高島俊男さんにも類似の発言がある。例えば『お言葉ですが：⑤ きれいな言葉勢揃い』（文春文庫）の「何処のさとのならひぞや」。産経新聞地方版の見出し「64人は何処に？」の「何処」の読みかたを論じ、ドコ・イツコ・イツクのいずれも正答だというのである。

川端康成『雪国』冒頭の「国境」はコツキョウカクニザカイかという議論がある。コツキョウと読まれると、我が脳裏には鴨緑江の風景などがうかび、クニザカイには国定忠治の姿などが映る。三年前の国語学演習で中島敦『弟子』を読んだ。わたしはデシと読んできたのだが、漢音のテイシと読む説もあるという。だが、そう読んだ文学事典類にはまだ会わない。学科の同僚にこの話をする、正宗白鳥の『何処へ』に及んだ。わたしはイツコエと読んできたのだが、池田一彦教授の話では、自然主義の小説なのでドコエがいいという。主人公の菅沼健次は人生を無意義と

考えて、いつもどこかへ逃げだしたいのだがその方角がわからない。それで「どこへ」であるらしく、文学事典類にもその形で出ている。

高島さんの筆は先に進む。永井一郎さんの著書『朗読のヒント』に、「私は学者と云々」の「私」はワタクシと読むことが正しいと文部省が指導している、とあることについて、「文章に応じて読者が自由によんでよいものを」一つに限定すべきではない、という。多くのばあいはそうである。だが、「ワタシ企業」という学生がいる現実はどうしたらよいのだろう。高島さんが批判したその本に文部省の指導とあるのは厳密にいうと正しくない。国語審議会の答申を受けた内閣告示の当用漢字音訓表の「私」に「わたくし」しかないことを遵守して、教科書が編集されているにすぎない。

その問題を旧稿「人称詞考」（『成城文藝』百八十一号2003年）で論じた。その第六節で、同一人でもその時の心理状態などによって、ワタクシともワタシとも言う、と書いた。いつもどう読んでもいいわけではないのだ。『字幕屋は銀幕の片隅で日本語が変だと叫ぶ』（光文社新書2007）で太田直子さんは、ワタクシを字幕に「私」と書

けない辛さを吐露している。変わりゆくこそ言葉なれど、新しい語形の字訓が簡単に定着しえないのは当然である。

「私」がワタシになったら、公に對する私が困ることになる。公おおぎ私わたし、あなたーわたし、君きみ僕ぼくと、同じ拍数で対応することは悪くない、とわたしは考える。

天皇誕生日の朝、第一放送六時のニュースで、前日おこなわれた記者会見の内容が報ぜられ、Mアナウンサーは天皇の一人称を直接語法の形で「わたし」と読んだ。昭和天皇のそれが「わたくし」であったことを右の拙稿に書いた自分には、今上天皇が「わたし」を用いるとは考えがたいが、録音を聞いていないので断言できない。記者会見の全文が読めるという『ash.com』を見ると、十二の「私」がある。すると、ニュースの原稿にも「私」とあったのを、Mさんが「わたし」と読んだのではなからうか。

もう一年余り前のことになる。衛星放送のテレビ番組「BSフォーラム 南原繁を考える」(2006.9.2)を見る機会があった。東京大学安田講堂で開かれた催しである。その席で、皇居の歌会始めに召人として作った南原繁の歌をアナウンサーが読みあげた。

ふるさとの讃岐の海のいわかげにさかなつりほけし：
：

ここまでしか記憶できなかった。第四句の字余りに引っかけたし、明治廿二年讃岐生まれの人が「さかな釣る」と詠むこともいぶかしかった。この歌は朝日新聞夕刊(1967.1.12)に次の形で載っており、「魚」には振仮名がない。

ふるさとの讃岐の海の巖かけに魚つり呆(ほ)けし少
年の日よ

西日本で、生物としての魚類はウオ／イオ、食品としての魚類はサカナであり、これが古い日本語の伝統でもあったことは、わたしども日本語を専攻した者の常識である。これについても高島さんの『お言葉ですが』⑥ イチレツランパン破裂して』に「この魚変だ」と題する文章がある。岩波書店の広報誌『図書』(2001.6)に載った柴田武「魚のタテとヨコ」による記述である。

魚は泳いでいる時から、人間につかまってマナイタになるまではウオ、マナイタ以後はサカナと呼ぶ、と云っていらっしやる。現在この区別をしないのが、東京、東北、北海道なんだそうです。

と紹介し、播州相生の友人は平気で「サカナ釣り」と言っているのだという。惜しむらくは高島さん自身がどう称しているかは分からない。

国定教科書の力か、テレビ放送の影響か、二つの相乗効果か、日本語が有したウオ／イオとサカナの使い分けがすっかり崩れてしまった。教科書の代表は、『二年生のおんがく』(1947)に載った勝承夫作詞・平井康三郎作曲「相談」。「みんなでまるくすわりましょ あしたの相談うれしいな 野球をしようか 魚つり それとも山にきのことり」だと言ってよからう。作詞者の勝は東京生まれの東京育ちである。

「魚」をめぐる右のような知識をもつことは難しいかも知れない。だが、魚津、魚座、魚市場、魚の目、飛魚、出世魚などの語は今も生きている。字余りに注意したら、適当な読み方に到達しえたはずである。放送局の体制についてわたしは何も知らないが、台本の読み合わせや確認、録画や録音の点検はいかになされるのか。互いに尋ねたり、教えたり、批評したりすることはないのだろうか。

十一月十一日廿三時、ラジオのニュースは、天津市で開かれた「全国豊かな海づくり大会」の式典における天皇陛

下の挨拶を報じた。琵琶湖に外来魚が繁殖して生態系を脅やかしていることに触れ、ブルーギルが自分の持ち帰った「ウオ」であることを心苦しく思うと語ったことを報じた。実際にどう言ったのか、これが直接話法なのか、新聞を調べたが判明しなかった。とまれ、日本放送協会の珍しいヒットである。

ついでに書く。各種の番組で短歌の朗読を聞くと、ほとんど第三句で切っている、歌意や句切れとは無関係に。おそらく百人一首の遊びで、上下の句に分ける習慣に染まったのだろう。百人一首に三句切れの歌が圧倒的に多いことは事実である。だが、例えば「春過ぎて夏来にけらししたへの衣干すてふ天の香具山」は明確な二句切れであって、「しろたへの」で切っては歌にならない。

日曜日の夜、就寝前は目を休めるために音楽や朗読を聴くことが多い。

第一放送の「ラジオ文芸館」は、数人のアナウンサーが交替で朗読する番組である。Kアナウンサーの山本周五郎『柳橋物語』を聴いたとき(2004.9.12)、「あたまをたれた」という声が目にはいって。江戸庶民の哀れの極みを描いた

この作品の結び、新潮社版『山本周五郎小説全集』第二巻を開くと左記のごとくである。

庄吉はなにも云わずに頭を垂れ、肩をすぼめるようにして出ていった。(p.157)

全部が作者の手になるか否か知らないが、かなり多くの振仮名があり、この箇所の前後には、貴方、燈明、位牌、囁いた、唼、賑わって、などがある。ついでに同巻に収める他の二篇『むかしも今も』『花筵』も読んだ。わたしが拾った「頭を垂れる」は六ヶ所、ほかに「頭を下げる／さげた」がそれぞれ一つ見える。以上、「頭」に振仮名がないのは偶然ではあるまい。作者は語よりも文字に気を配って仮名を振ったようなのだ。

「そんなことはない」と首を振ったけれども(p.287)の「首」には振仮名がない。すると、「まきがそう云うのを黙って聞いていた直吉は、そのとき頭を振って、まきの言葉を遮った。」(p.244)の「頭」はどう読むべきだろうか。クビではあるまい。すると、考えられるのは「カブリ」である。

成句「頭を垂れる」には、同じ番組でもう一度遭遇した。Aアナウンサーが朗読した芥川龍之介『杜子春』

(2007.4.15)の「かしらを垂れたまま」である。岩波書店版の全集第六巻を見ると、第五節、閻魔大王の間に沈黙を守る杜子春を描いたくだりである。

ふと思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鉄冠子の戒めの言葉です。そこで、唯頭を垂れた儘、唾のやうに黙つてゐました。

同じ成句「頭を垂れる」の「頭」を一人はアタマ、一人はカシラと読んだわけである。わたしの教わった日本語では、ひとつ「頭」字で書いても、おおむね、垂れたり巡らせたりするのはコウベ、下げるのはアタマ、振るのはカブリ、下ろすのはカシラだったのだが。なお、杜子春と洛陽のアクセント、Aさんは一貫して第二拍が高いトシシユンとラクヨウであった。

「日曜名作座」は十一時過ぎなので、タイマーをセットして寢床で聞くことが多い。今年は五十年記念の再放送が多かった。七月十五日は、近松門左衛門を扱った杉本苑子『埋み火』の第四回、不義密通から起こった殺傷事件を本屋が知らせに来た。その本屋が近松に対して言ったことは耳に引っかけかった。「ヨンジユウオトコ」である。

日本人にとって、年齢の「四十」は単なる数、三十九の

次、四十一の前の数ではない。分別ある年齢、もう若くはない年齢として、古来さまざまの表現を生んだ。四十肩、四十暗がり、四十過ぎたら自分の顔に責任をもて、そして「四十にして惑わず」など、たちどころに四つや五つは思いうかべられる。

男役を演じたのは大正二年生まれの森繁久弥さん。アナウンサーから俳優に転じた文化勲章受章者である。上引の池上禎造さんは、ある宴席で自己紹介するさい、自身の生年を「明治シジュウヨ年、私どもはヨンジュウとは申しませんでした」と始めた。わたしはこの発言に促されて「和漢数詞の混用」という短文を書いたことがある（『言語』1980.10）。この記憶があったので、ことさらに気になったのである。

このようなことが重なるに耳に自信がなくなる。そこで十月廿一日の「ラジオ文芸館」、森鷗外『最後の一句』は録音しながら聴いた。桂屋太郎兵衛の娘いちが奉行所へ嘆願に行くくだりで、二番鶏の声を聞いて家を出ると、「戸の外は霜のぎようであった」と読まれた。「ぎよう」が分からなくて原文を見ると、「霜の曉」とある。「曉」を「あかつき」と読むではふつうな理由を、わたしは見いだし

ていない。

七月十日の夜、北海道で公開録音した「真打ち競演」を聴くことがあった。落語の出し物は「悋気の火の玉」、演者は春風亭なにかし。

鼻緒問屋の旦那が吉原の遊女を根岸の里に囲ったことから始まった妻妾の嫉妬比べ。話の終わり近く、互いに相手の藁人形を作って釘を打つくだりで、わたしの耳は奇妙なことを三回とらえた。己が耳を疑いながら手近の紙に走り書きした文字は、「祝いの釘」「祝う」「人を祝わば穴二つ」。因みに、七寸釘はシチスンクギであった。

不審に思つて落語のテキストを見ると、『新・ちくま文学の森』9の、八代目桂文楽の口演したものは三箇所とも「祈る」で、初出には「いの祈り殺そうてんですが」と振仮名がある。いよいよ混乱したわたしは、本学の図書館で落語のCD三枚を借りて聴いた。昭和三十七八年ころの文楽の録音では二枚とも確かにイノル、シチスン釘である。残り一枚、今の三遊亭圓楽は、ノロウ、ナナスン釘である。

故事諺辞典の類いをみると、ノロウもイノルも行われていたのであった。例えば『成語大辞苑』（主婦と生活

社 1995) の「人を呪わば穴二つ」の項で、河鍋曉齋の挿画「狂斎百図」中の書き込みは「人をいのらバ穴二つ」である。東京堂出版の『故事ことわざ辞典』(1956)の「人を呪えば穴二つ」の参考欄には、「人を祈らば穴二つ(秋田)」とある。なんと、イノルの形が郷里の秋田県にあったとは。急いで秋田県教育委員会編『秋田のことば』(2000)を見ると、秋田市の名はないが県下に広く使われていることがわかる。秋田市で生まれ育った九十五歳の母に電話すると、呪う意でイノルは使わないという。『日本方言大辞典』によると、呪う意で「いのる」を使う所は、十九世半ば、野崎教景の方言書『久留米浜萩』の熊本県玉名郡だけである。

「愷気の火の玉」の種本は、桜川慈悲成の嘶本『延命養談数』(天保四年)所載の「怪談」らしい。一千字ほどの嘶に諺は見えないが、確かに「ねたみいのり」「たがひいのり」がある。イノルとノロフは、宣・告・祝などの漢字があてられる古語「のる」からの派生語なので、用法が交錯して当然なのであった。室町時代には「呪う」意のイノルが広く流布してもいた。だが、今は意味が離れすぎて、現代人には理解しがたい。

それに関わって、三十二年まえの毎日新聞の記事を思い出した。東京の印章会社が売り出した年賀スタンプで、「謹んで新年の御祝詞を申し上げます」の「祝」を「祝」に誤ったのだという(1975.12.19 朝刊)。日本は勿論、中国でもほとんど使われない「祝」と彫ったのである。この字は、中国では「祝」にも「祝」にも通ずること「いのる」と同様なのだが、とにかく大急ぎで回収するという騒ぎになった。ラジオで聞いた演者の名譽のためには、「イワウ」がわたしの聞き誤りであることが望ましいが、僻耳でなかったら、台本で稽古して「祝」を「祝」と読み誤ったということになるだろう。

古典落語を現代人に提供するには相当の配慮が必要だということである。

六月十六日朝八時前の関東地方のニュースで、羽田・上海間に定航空路が開設される運びになった旨を報じた。そのさい、上海の空港の名をアナウンサーは少なくとも二回、ニジバシと読んだ。その夜十時のニュースでは、別のアナウンサーが三回とも同じく読んだ。中国語らしくない名前だなあ、と気にかけていると、同月廿六日の夜十時の二

ユースでも、男女のアナウンサーがともにニジバシと読んで（中には第三拍が清音の「ニジハシ」と読んだものもあったかもしれないが、ここで重要なのは連濁か不連濁かではなく、音読みか訓読みかである）。

ニジバシはどう書くのか新聞を見ると「虹橋」。廿五日の朝日と毎日の夕刊は初出箇所ではホンチャオと振仮名する。振仮名がない讀賣と東京は、コウキョウと読ませるのでろう。廿六日の朝刊も毎日は虹橋で載せ、讀賣、日経は振仮名しない。

その航空路に第一便が飛んだ九月廿九日、第一放送の正午と午後七時のニュースでは、四回ともニジバシ、アナウンサーは同一人であった。その深夜、出先で梯子して見たテレビ東京、読売テレビのニュースも、ニジバシであった。当日の夕刊は、毎日、讀賣に振仮名があった。放送と新聞とで固有名詞の読み方がわかれたわけである。

近年の新聞は、日本以外の漢字圏の人名も、盧武鉉^{ノムヒョク}、金正日^{キムジョンイル}、胡锦涛^{フー锦涛}、温家宝^{ウエンチアオ}など、当該者の母語に近い発音で仮名づけする傾向にある。だが、日本放送協会は、中国人の名は胡锦涛^{こきんとう}、温家宝^{おんかほう}、武大偉^{ぶだいゐ}などと日本漢字音で読み、朝鮮人の漢字名は朝鮮漢字音で読んでいようだ。そ

れなのに虹橋をなぜ訓よみするのだろうか。

わたしの書いたものが公刊前に他人に読んでもらう機会は多くない。学会誌への投稿と依頼原稿、それに本誌の編集委員が目を通してくれた原稿くらいのものである。だから、しょっちゅう過誤をしでかし、己れの無智と軽率を嘆いている。だが、大新聞社や大放送局のばあいは全く話が違ふ。外に出す前にも出たのちも、厳しい審査・点検を経るはずである。それなのにこのような信じがたい珍事の出るするのは何ゆえなのか。

本学部の非常勤講師の影島香代子さんは、もと名古屋テレビ、今はフリーのアナウンサー。その影島さんの話では、原稿をもらうと、まず固有名詞の読みかたを確認するといふ。それは素人でもわかる道理、そして虹橋は中国の固有名詞である。かつて大日本帝国は台湾の統治にさいして、「塔加沙谷^{たかかさ}」などと書かれていた先住民の名称に日本の雅語「高砂^{たかさ}」をあて、地名「高雄^{カウロン}」をタカオと訓よみした。上海の空港名を中山道の首駅板橋^{いたばし}なみにニジバシと読むのはそれに等しい。日本の放送人にとって、中国山東省の港灣都市はアオシマで、大唐の都はナガヤスなのだろう。

(二十七年冬)